

# 天台智顛の「秘密不定教」創唱の意図

張 堂 興 志

(二) 化儀四教の一つである「秘密不定教」は、如来側の「三輪不可思議相」、及び衆生側の得益の「互相不知」という説明理解に終始する。これは、天台大師智顛(五三八〜五九七・以下、智顛)の説に起因するが、『玄義』所説の「秘密不定教」を改めて検証したところ、智顛は經典中の如来三輪に関する戲曲的記述を考慮しつつも、その真意は、(1) 当時の教判において、兎角一段下に見做される『阿含經』や二乗に対し、新たに「秘密」の不定教を見抜くことで、大乘との同価値性を見出そうと努めたことにある、と一応結論するに至り、試論を提出した<sup>(1)</sup>。小稿ではこの結論を別の角度より支えてみたい。

(二) 智顛は他師の教判論における不定教を、偏方不定教と見做して批判し、あらゆる経の、あらゆる場面に不定教は存在すると主張する。そのなかで「秘密不定教」は阿含時で扱われる。これは次の『玄義』十卷教相が何よりの証拠である。

酪中殺人者。如智度論云。教有二種。一顯露教。二秘密教。顯露者。初轉法輪。五比丘及八萬諸天得法眼淨。<sup>(A)</sup> 若秘密教。無量菩薩

得無生法忍。此是毒至於酪。而能殺人也。(大正三三、八〇六b)

阿含時は顯密兩不定教が併設され、「顯露不定教」の相は『四阿含』に具体的に散見される、「初轉法輪に五比丘や諸天が法眼淨を得た」事例を指すが、「秘密不定教」の根拠となる記述は、『四阿含』に確認出来ず、智顛は『大智度論』卷六十五にそれを求める。『智度論』当該箇所は、「初轉法輪も大乘を説く」と云い、「密」轉法輪<sup>(2)</sup>の語を用いて波線部(A)の如き初轉法輪における不可思議の不定教を明かすのであり、従来、秘密不定教の淵源とされている。ただし、『智度論』所説の秘密教は菩薩に限定されることに留意が必要である。『智度論』は、「秘密不定教」の創唱に際し、ひとつの示唆を与えるものでしかない。何故かといえ、智顛は初轉法輪において「在家の者が無生法忍を得る」という『提謂波利經』を「秘密不定教」の一傍証として重視し、『玄義』十卷教相「判教段」に、「若し声聞を論ぜば」とした上で、次のように述べることから明らかである。

若論聲聞。一秘密合。二顯露合。秘密合者。初爲提謂說五戒法。已有密悟無生忍者。<sup>(B)</sup> 況修多羅方等般若。豈無密悟。此則不論。(大正三三、八〇九b)

この波線部(B)は、「在家の人ですら五戒を聞くのみで無生法忍を得たのだから、しからばなおさら阿含時に、二乗が無生法忍を得る、という不定教の相が説かれていても不思議ではなからう」という論法である。しかし『阿含經』中に「声聞が無生法忍を得る」という直接的証拠がないため、「秘密不定教として扱わざるを得ない。このように「密転法輪」を「秘密不定教」と言い換え、阿含時の教説や二乗も、大乘教や菩薩と同等である、と積極的に捉えるのが智顛の經典觀の特長であり、「秘密不定教」の意図でもある。ここにおいて「不定教に関連して使われる「顕露」とは「經典中に明文化されている」事柄を指し、「秘密」とは「經典中に文字として確認できない」ものを指す、という仮説が提唱できよう。これは『玄義』一卷教相の教相三意(大正三三・六八三b~六八四a)を明かすなか、「法華は顯露であり秘密ではない」と論じる箇所に、

今法華是顯露非秘密。(中略)此經。與衆經相異也。又異者。餘教當機益物。不説如來施化之意。此經明佛設教元始巧爲衆生。作頓漸不定顯密種子。(中略)衆經尚不論道樹之前師之與弟近近權實。況復遠遠。今經明道樹之前權實長遠。(中略)經云。昔所未曾說

今皆當得聞。(中略)當知。此經異諸教也。(大正三三、六八四a)とあることから、その妥当性は示されよう。つまり「秘密不定教」の「秘密」には少なくとも、①如來側の「三輪不可思議」、②衆生側の「互相不知」、③点線部(ロ)の「仮説」といった意味が存在する。実はこの「顕・密」について、吉藏(五四九~六二三)が自説を展開しており、智顛との比較を試みると、新たに興味深い点が見えてくる。

(三) 吉藏の經典觀については、菅野博史氏が、「吉藏は、(中略)多くの大乘經典は道を明らかにすることについて相違はないこと、したがって、価値的に平等であることを主張している。このことが吉藏の經典觀の基本であることはよく知られていると思う。(中略)ここに一つの疑問が生じる。それは「顕道無異」が大乘經に限られ、小乘經典が除外されていることに関しての疑問である。(中略)諸大乘經典は声聞に対する教化態度は異なっている、菩薩に対して眞実を顯わす点は共通であるから、その点を捉えて「顕道無異」と主張されるのである。そして、このような意味においては、小乘はその仲間に入ることとはできないのである。(中略)さて、吉藏の「諸大乘經顕道無異」の思想は、(中略)淨影寺慧遠にその先蹤を求めることができる。(中略)慧遠にも、「諸大乘經顕道無異」という吉藏の思想と共通する思想があったと言えよう。」と、結論的に纏められている。また平井俊栄氏は、吉藏にお

ける顕密義について、「吉蔵の二種教法の範疇に属すると考えられるもので、特殊な用例に「顕密」の義がある。(中略)つまり三乗教を顕示教、法華を秘密法といって仏法の二種を大別しているのである。法華經を単に大乘の置き換えとみなすならば、小乗が顕示、大乘が秘密の意となつて声聞藏・菩薩藏の二藏の範疇に摂められる。しかし(中略)吉蔵は、ともに菩薩藏に摂せられるべき般若經と法華經の優劣を論じて、顕密の基準からすれば法華は般若に勝ると述べていた。したがつて顕密には二義があることになる(中略)つまり顕密には大乘・小乗の別と、義の浅深の別との二義があつたのである。」と、論じられている。こういつたなかで、吉蔵の『法華遊意』顕密門に、

第四料簡顕密問。小乘亦是説密一乘不。答。佛説小乘意在悟大乘。故説小乘亦是密説一乘也。(大正三四・六四六c)

とある。吉蔵は「小乗も秘密に一乘を説く」というのである。これは智顛の經典觀に近い主張であり興味深いが、やはり吉蔵の經典觀は菅野氏が、『百論序疏』に「一切經亦通明中道、通明正觀、則一切經是一經」(大正四二・二三二下)とあるように、稀に一切經の平等性を指摘することはあつても、大体において大乘と小乗とを区別する、いわゆる二藏判(一切經を声聞藏と菩薩藏の二藏に分類する教判)は吉蔵の著作の随所に見られるのであり、この範圍を出ないものであろう。」と指摘され

る通りだろう。

「秘密」について、淨影寺慧遠撰『大乘義章』卷十一には、依了義經不依不了義者。分別有二。一就大小相對分別。或小乘名了大乘不了。小乘能顯故名爲了。大乘祕密故名不了。或大乘名了小乘不了。大乘顯實名之爲了。小乘覆實名爲不了。

(大正四四・六七九b)

と、「大乘」秘密の語を用い、小乗との優劣論を展開する。さらに『大智度論』卷百には

問曰。更有何法甚深勝般若者。而以般若囑累阿難。而餘經囑累菩薩。答曰。般若波羅蜜非祕密法。而法華等諸經說阿羅漢受決作佛。

(大正二五・七五四b)

とあるように、「秘密」の語に一種の優位性を認める流れが既に存在し、これらを踏襲したものが吉蔵の顕密義である、と見ることも可能であろう。

(四)さて注目すべきは、この『智度論』の記述について『玄義』十卷教相の章安灌頂の私記が、吉蔵の『法華玄論』を用い、他會通法華明二乘作佛。是祕密。般若不明二乘作佛。故非祕密。祕密則深般若則淺。何者。般若明菩薩是佛因。於義易解故非祕密。二乘作佛與昔教反。於義難解。故是祕密。(大正三三・八一c)と、『般若』と『法華』との比較を論じることである。両者は「秘密」の語が、「二乗作仏」を意味する」と理解しているのである。智顛も『智度論』の同所には着目するが、その論じ方が異なるのである。つまり『玄義』十卷教相に菩提流

支の半滿の義を難じて、次のように云う。

次難流支半滿義。從初鹿苑三藏皆明半義。從般若已去訖至涅槃。皆明滿者此不應然。從得道夜常說般若。鹿苑已來何曾不滿。(中略) 當知鹿苑不應純半。從般若已去諸經皆滿者。(c) 釋論云。般若非秘密教。以付阿難。法華是秘密教付諸菩薩。若同是滿教。何得一秘一不秘。① 又若皆是滿應同會三。(大正三三・八〇四a b)

ここでは「鹿苑より般若大乘を説いている」と断言する。

これは別に論じたが、智顛は『阿含經』に大乘の人法二空説を見抜き、また『智度論』を根拠に、『阿含經』も般若空を説くと捉えるのであり、智顛は相待妙的な、いわゆる「別の五時」觀を前面に出す傾向が強いとは言え、その裏に常に絶對妙的經典觀を持ち合わせている事実を見逃してはならない。

そして『玄義』では、「得道の夜より常に般若を説いてきたのだから、鹿苑(阿含時)は必ずしも小乗とは限らない」また、「鹿苑は専ら小乗を説くのみではないと知るべきである」と強く主張した上で、注目すべきは波線部(C)に「般若以降の經典が全て大乘ならば、般若は秘密教でないから阿難に付属し、法華は秘密教だから菩薩に付属する」と『智度論』は言う。しかし般若と法華は同じく大乘なのだから、どうして法華が秘密で、般若が秘密でないと言うのか」と、いわゆる「通の五時」的視点で「秘密」を論じているのである。

さらに波線部(D)は、爾前、要は鹿苑時にも「秘密」と

いう語が意味する「二乗作仏」がありうる、と言及するもので、優劣論に「秘密」を用いるのとは基本的に異なる。

(五) 既述の通り「秘密不定教」の淵源は『智度論』卷六十五にあるのだが、智顛が『智度論』所説の「密」転法輪を「秘密」不定教へと転換するのは、「秘密」の語が、「二乗作仏」をも意味するものであり、『智度論』卷百の「秘密」義が、実に「秘密不定教」の「秘密」義にも影響しており、よって冒頭の点線部(イ)の結論は支持されよう。またこのことは『玄義』が阿含時で「秘密(不定)教」に言及し、またしばしば阿含時の二乗の後教への密入が示唆されることからも首肯されよう。

1 拙稿「秘密不定教」に関する一考察」(『天台学报』第四十号所収) 参照。

2 大正二五・五一七a b

3 菅野博士著『中国法華思想の研究』所収「吉藏の經典觀」三四九〜三五五頁、※波線部は筆者が付す。

4 平井俊榮著『中国般若思想史研究』五〇一〜五〇二頁

5 菅野前掲書・三五四頁の脚注

6 拙稿「天台大師における大小乗觀の把握について」(『大正大学大学院研究論集』第二十九号所収) 参照。

(キーワード) 秘密不定教、二乗作仏、『大智度論』、智顛、吉藏

(大正大学綜合佛敎研究所研究生)

(假), *zhong* (中), *zhi* (止), *guan* (觀), *xiu* (修), *xing* (性), *cang* (藏), *tong* (通), *bie* (別), *yuan* (円), and other Tiantai doctrines in his commentary.

### 117. One Conception of Sattva in Zhiyi's Doctrine

Hōdō SHIOIRI

At the beginning of Chapter Seven of the *Vimalakīrti-nirdeśa* translated by Kumārajīva, thirty comparisons were pointed out to explain thoroughly that *sattva* is non-existence, namely that it is *śūnya*. These comparisons are classified into three kinds: ① Existing as phenomena but not existing as real bodies, ② Not existing theoretically and ③ Not existing in reality in general theories.

Seeing such a classification, Zhiyi regarded these comparisons to understand respectively: ① Earthly truth for *sattva* (假), ② Essential existence for *sattva* (空) and ③ Existence enhanced from both existences (中). Particularly, he discussed comparisons of type ③ and elucidated that they existed in fact even though they are impossible at first glance. This explanation is a jump from the context of the sūtra and quite unique from opinions of other scholars.

Though the sutra after this part elucidates the compassion of the bodhisattva, Zhiyi admitting the earthly meaning regards the *sattva*, the object of the bodhisattva's compassion, as not a complete *śūnya* and thus finds a foundation for compassion.

### 118. Zhiyi's Intention of the Secret Teaching 秘密不定教

Kōshi CHŌDŌ

When we look closely into the *Fahua xuanyi* 法華玄義, it is often mentioned that enlightenment can be attained secretly by people with the capacity of the two vehicles.

In the *Tiwei boli jing* 提謂波利經, which expounds the Five Precepts and the Ten Good Acts 五戒十善 to lay believers in the secular world, it is men-

tioned that some have covertly reached the ultimate insight, *anutpattika-dharma-kṣānti* 無生法忍, that nothing arises or perishes. Zhiyi 智顓 acknowledged this fact and pronounced that enlightenment is possible even through Hīnayāna doctrines at the time of the preaching in the Deer Park 鹿苑時.

However, there is no conclusive verse or prose that can be seen as evidence in the *Tiwei boli jing* which clearly indicates that some have attained enlightenment within the early stages. Thus, due to the nature of its teaching as being unable to be discussed in words fully, it must be called the secret teaching.

### 119. Interpretations of *neixun ziwu* in the Chinese Tiantai and Japanese Tendai Schools

Masashi YANAGAWA

The concept of *neixun ziwu* was developed by Zhanran. Zhiyi taught that the Lotus Sutra is transmitted eternally from buddha to buddha. Addressing theoretical problems posed by the Lotus Sutra having no origin in an infinite past, Zhanran proposed the existence of a first buddha. There was, however, no doctrinal basis for a first buddha. Zhanran thus determined that there was a period of “no teaching” during which the first buddha became enlightened due to his own “internal perfuming” (*neixun*), instead of through coming under the influence of the teachings of a previous buddha. He used this term *neixun* exclusively for discussing the enlightenment of the first buddha.

Subsequent masters of Chinese Tiantai and Japanese Tendai doctrine developed two interpretations of Zhanran’s theory. One camp believed the notion of a first buddha to be factual and the other claimed it to be hypothetical. Many Song dynasty masters such as Zhili, Yuanqing, and Shanyue took Zhanran’s theory at face value, while Japanese (predominately) Tendai masters such as Genshin, Kakuchō, and Shōshin proclaimed it hypothetical. They raised two main objections to Zhanran’s theory. First, they questioned whether it is possible to seek for a beginning of Buddhism. Second, they argued